

2025 年 戦争体験を語り継ぐ集い

＜第32集＞戦時体験記録集

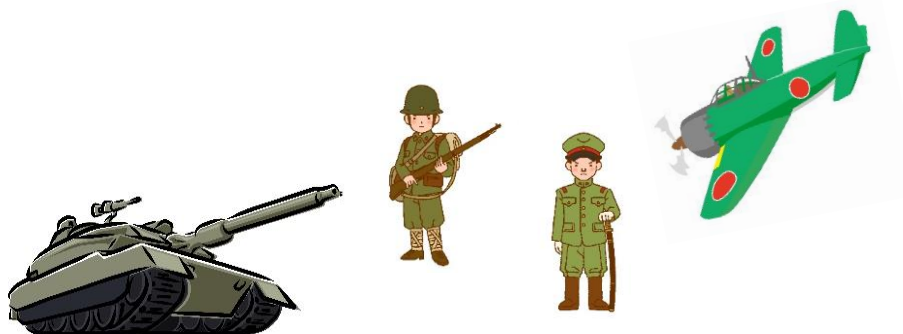
2024年ノーベル平和賞受賞

日本原水爆被害者団体協議会

この受賞が背水の陣にならないことを祈ります

戦争体験を語り続けることが

身近な平和や命を守る一助になりますように



戦争になると 人が人ではなくなります 命が命ではなくなります

はじめに

◇「戦争体験を語り継ぐ集い」とは

名古屋市主催講座であり、緑生涯学習センターの主催事業です。進行は「戦争体験を語り継ぐ会」が担当し、行政と市民が協働した取り組みを続けています。

戦争を知らない、のちの世の人たちのために、戦争が始まった時の現実はどうだったのか、戦時中の暮らし、軍隊生活の実際、危険と隣り合わせの毎日を過ごさなくてはならない、厳しい現実になることを、伝えています。戦争の悲惨さを伝えることで、平和と平和を守る大切さを、考えていただける機会にさせていただくことを願っております。また、体験者ご自身に直接語っていただくことの重みを大切にしています。命の大切さ、平和のありがたさへ思いを馳せる機会になることを願いながら、毎年開催しています。

◇戦時体験記録集について

戦争を体験した方々の声が減少しており、高齢化や聞き取りの難しさが現状です。体験には非常に過酷な現実があり、その内容を読み進むことで心が揺れることもあるでしょう。しかし、それこそが「戦争の現実」です。その重みを受け止め、今を生きる私たちの人生や命、そして平和への思いを新たにできる機会と捉えています。今年も掲載へのご協力へ感謝申し上げます。変わらぬ平和への願いを込め、二度と悲惨な戦争を繰り返さないために、平和の礎の一助となれば嬉しく思います。この冊子を手にとってくださる皆様から、平和への祈りが広がりますように。

毎年継続して発行してきましたが、今年で最後となります。刻み続けた長い歴史を「復刻版」として残して参ります。ぜひ皆さまのお手元にも置いていただければと思います。

◇緑区戦時体験記録集復刻版◇

3年越しの作業でしたが、いよいよ完成します。終戦記念日に合わせて【8月15日】よりDVDにて皆さまへの配布を開始いたします。次世代へ語り継ぐために、図書館や小中学校への寄贈も準備しております。ページ数が多いため、印刷にて配布することはできません。ご理解くださいませ。ご希望の方は、担当者までご連絡ください。また、教育関係者やご友人知人の皆さまへ手渡ししていただければ幸いです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

担当者連絡先：戦争体験を語り継ぐ会 荒川淳子 090-3582-3027

「戦争のない平和な世界を！」今年もご賛同くださいました皆さまのご協力により、戦時体験記録集が完成いたしました。感謝申し上げます。

戦争体験を語り継ぐ会 一同

第36回『戦争体験を語り継ぐ集い』プログラム

令和7年5月17日(土) 10～12時

1. 開会の挨拶
2. 緑生涯学習センター堀田館長より
3. 語り継ぎタイム(1)
 - ・森下規矩夫さま (P1)
4. 展示品のご案内
休憩
5. 語り継ぎタイム(2)
 - ・西形久司さま (P3)
6. 閉会の挨拶

＜第32集＞戦時体験記録集

◆目次◆

2025年語り部タイム

私の空襲体験とバンデリンドームナゴヤ

(ピースあいち語り手の会 会員 森下規矩夫) - - - - - P1

名古屋空襲～空からのまなざし～

(名古屋空襲研究会会員 東海高校教諭 西形久司) - - - - - P3

2024年語り部タイム記録

戦争の中で人は(大橋路代) - - - - - P7

シベリア抑留と引き揚げ(案内役:現職高校教諭 水野晴仁) - - - P12

展示品説明(戦争体験を語り継ぐ会会員 吉井弘和) - - - - - P30

次世代からのメッセージ

父の新兵当時の体験(戦争体験を語り継ぐ会会員 吉井弘和) - - - P32

【なぜ今、核問題を考えるのか:知る・伝える】

(長崎大学核兵器廃絶研究センター客員研究員 西山心) - - - - - P33

2025年 語り部タイム

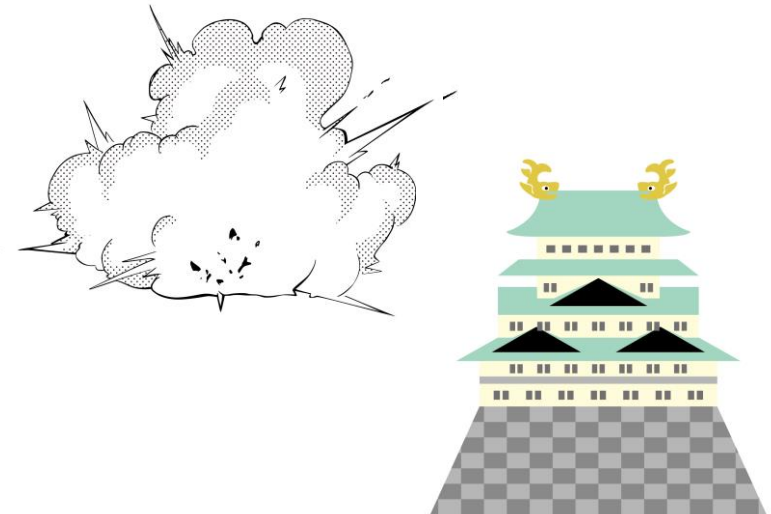
私の空襲体験とバンデリンドームナゴヤ

ピースあいち語り手の会 会員

森下規矩夫 /1937年 名古屋市茶屋ヶ坂近くで出生

1. **バンデリンドームナゴヤ** そこには、軍用機用の発動機を製作する日本最大の工場がありました。会社名は三菱重工業名古屋発動機製作所です。
2. **明治政府以降** 資源の乏しい日本はそれを獲得するために隣国への軍事介入を続け、領土を拡大してきました。その結果、国際的孤立や経済封鎖を受け、それを打開するために太平洋戦争に突入しました。戦いの初期は優勢で、広大な地域を占領していました。
3. **戦争が始まって変わる国民生活** 男子は召集され戦場へ。召集されない男子と未婚の若い女性は軍事工場へ動員されました。
4. **空襲の始まり** アメリカ軍の反撃によりサイパン島が占領され、航空機産業の中心地であった名古屋への空襲が始まりました。
5. **本格的な空襲の始まり** 日本への本格的な空襲は1944年12月13日、三菱発動機工場から始まりました。初めての空襲体験で、防空壕へ避難しました。我が家が焼失し、家族は運良く皆無事でした。翌日、中村区の伯父の家に避難しました。
6. **避難先での爆撃** 避難先で1945年3月19日に夜間爆撃を受け、焼夷弾から逃れました。周囲は焼け野原となりましたが、伯父の家は焼失を免れました。食料事情が悪化し、学校が閉鎖されたため、6月頃に三重県鈴鹿市へ縁故疎開しました。

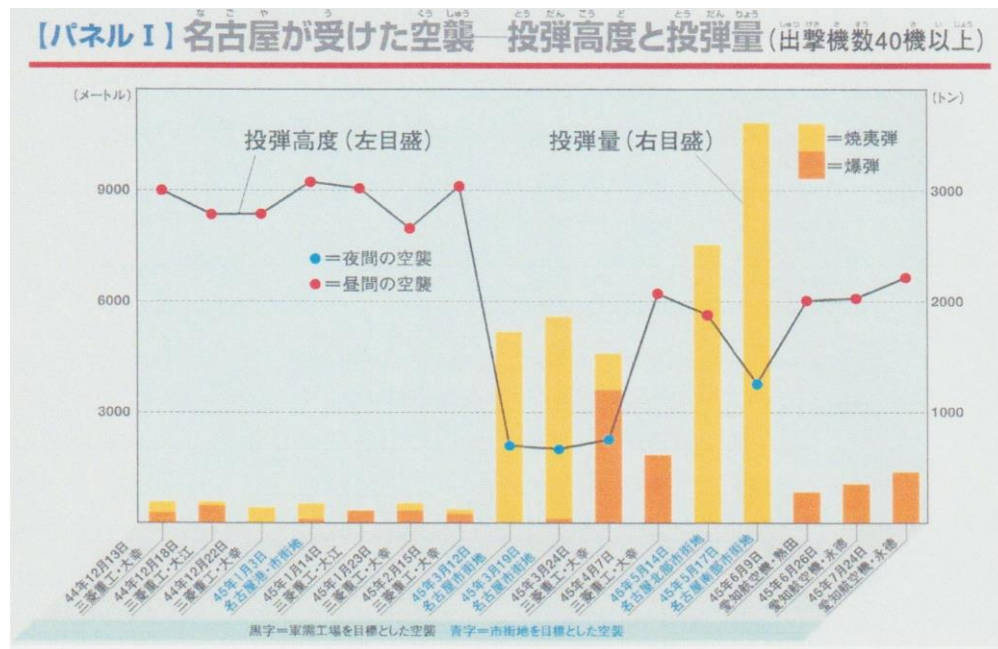
7. **敗戦後** 疎開してから約2ヶ月後の8月15日に敗戦。占領政策により社会が激変し、生活に明るさと安心感が戻りました。三菱発動機工場は閉鎖され、跡地にドームが建設されました。教訓をもとに、平和で民主的な国作りが始まりました。
8. **戦後の日本と平和主義** 第二次世界大戦で日本は甚大な損害を受け、約310万人が命を失いました。また、アジア全域で約2000万人が犠牲となり、多くの地域を荒廃させました。この惨劇の反省から、戦後の日本は平和主義を貫いてきました。しかし近年の安保法案の成立や軍事費増額などにより、その平和主義が脅かされています。現在、日本は民主主義国家であり、国民の声が重要です。戦争の本質を見据え、平和を守る努力を続けることが求められています。



名古屋空襲～空からのまなざし

2025 年 5 月 17 日 西形久司

① 投弾高度と爆弾の積載量の関係



このグラフは、米軍 B29 部隊が名古屋の市街地や軍需工場を爆撃したときの投弾高度と爆弾の積載量の関係を示したものです。ピースあいちの常設展示のパネルために作成しました。名古屋の空襲を左から時系列で並べてあります。折れ線が投弾高度で、棒グラフが爆弾積載量（黄色＝焼夷弾、オレンジ＝爆弾）です。初めのうち昼間の時間帯に高い高度から爆弾を用いてピンポイントで航空機工場を狙いましたが、冬の日本列島上空の偏西風に妨げられ、米軍としては思ったほどの成果が上がりませんでした。日本の夜間防空戦闘力が弱体であることを見抜いた米軍は、1945 年 3 月から夜間に低い高度から市街地を焼夷弾で爆撃しました。ひと晩で 10 万人が犠牲になったという 3 月 10 日のいわゆる東京大空襲を手始めとして、12 日名古屋、14 日大阪、17 日神戸、19 日もう一度名古屋と、日本の 4 大都市を次々に焼け野原にしました。

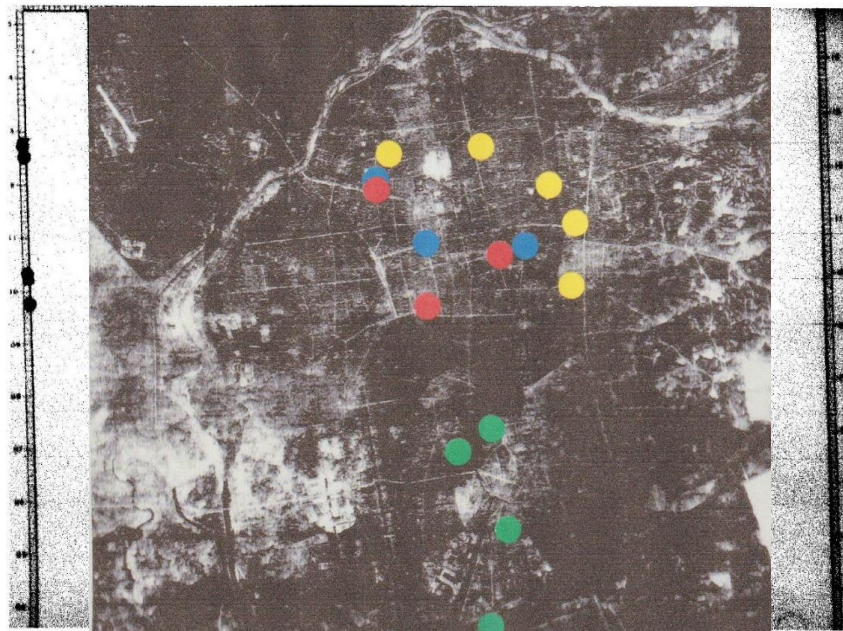
このグラフから何が読み取れるのでしょうか——初めの頃は投弾高度を高くしたため、日本側の反撃をかわすことができましたが、燃料消費量が大きくなってしまい、燃料の分だけ爆弾の積載量が少なくなっています。夜間、低い高度からの爆撃へと戦術転換すると、その分燃料が少なくて済むので、爆弾（焼夷弾）積載量を増やすことができるようになった、という投弾高度と爆弾積載量との関係が明確に表れています。

② 名古屋のゾーン・マップ



米軍は人口密度を基準に、攻撃目標と下日本の大都市市街地をゾーン分けしていました。人口密度のより高いゾーンⅠが最優先のターゲットで、ゾーンⅡはそれに準じるターゲットです。名古屋の場合、1945 年 3 月の 2 度の空襲でゾーンⅠを、5 月の 2 度の空襲でゾーンⅡを、それぞれ焼き払いました。

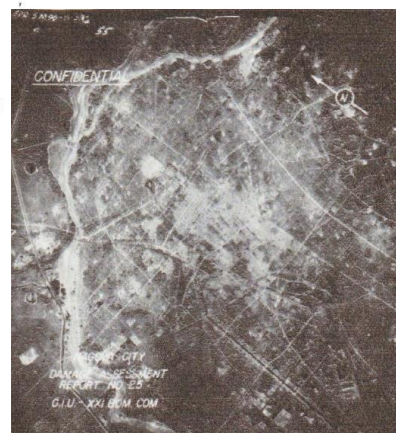
③ 名古屋空襲の爆撃中心点



米軍 B29 部隊は、作戦任務に際して各航空団に目標＝爆撃中心点（照準点）を指示しました。図中の赤色が 1945 年 3 月 12 日、青色が 3 月 19 日、黄色が 5 月 14 日、緑色が 5 月 17 日の爆撃中心点です。今回不発弾が発見された丸の内のあたりは 3 月 19 日の爆撃中心点に近く、実際に発見された不発弾＝M76 は、名古屋空襲では 3 月 19 日にのみ使われていますから、丸の内の不発弾が投下されたのは、1945 年 3 月 19 日の空襲であり、80 年の時を隔てて私たちに戦争の記憶を呼び覚ましてくれたことになります。

④ 米軍が撮影した名古屋北部市街地の画像

米軍が名古屋の上空から撮影した写真で、何枚かの写真を合成して作成されています。庄内川の形状から大体の場所が読み取れるかと思います。



⑤ 米軍が撮影した名古屋市街地の画像



この写真は 5 月の 2 度の爆撃のあとで名古屋に与えた損害を評価するために作成されたものです。

2024年 語り部タイム記録

戦争の中で人は

大橋 路代

私自身、戦争は体験してないけれども、体験したと言えはしているかもしれませんが。生まれが1945年5月20日です。だから、私はいつも、自分の年齢が戦後何年と重なっていて、いつも背負っているような感じなんです。その頃（戦争中）は日本だったけれども、今は日本ではないサハリン（現樺太）で生まれました。

「戦争っていつ始まった？」と「1941年12月8日と1945年8月15日」を書き、その間に「8月6日と8月9日」を並べて書きます。若い人たちに「何の数字分かる？」って言うと、まず「12月8日はジョン・レノンの日」と言う、確かにそうです。15歳、16歳、17歳の高校時代、青春時代の子どもたちの頭の中には「12月8日は太平洋戦争が始まった日」とは入ってないから、戦争がインプットされてないんです。日本列島も、朝鮮半島も、台湾も、その上の樺太の半島も書いて「私はここで生まれたのよ」って、ていねいに話しています。

父は樺太の飛行場勤務で、もちろん兵隊です。母は軍属として、結婚間もない新婚の頃、19年に樺太へ行き、20年5月に私が生まれました。飛行場勤務で、軍隊はいたけれども、なんと4月の段階で、軍隊は妻や子どもたちを置いたまま、本土に帰ってしまいました。父から聞いた話では「転戦」と言い、本土が、東京も空襲されるような状況で「本島を守らなければいけない」と、軍隊を全部引き上げていきました。後に残されて、私はそこで生まれました。8月の初めにはソ連が参戦するという雰囲気があって「逃げなきゃ、逃げなきゃ」と、母たちは乳飲み子の私を抱え、多分、歩ける子の手を引っ張って、必死で港まで着いた、という話はよく聞かされました。

私自身も、小学校の頃（終戦後）のラジオでは毎日の尋ね人の放送を覚えています。他人事で聞いていたんです。でも、母親から「実はこういうふうで、引き上げるときには大変だった」と聞きました。私は5月生まれで、7月にはまだほんの2ヶ月でした。ちょっとしたことでワーワー泣いたり、泣きやまなかったりと、ぐずったと思うんです、赤ちゃんだから。でもそれを必死になって、抱きかかえて本土まで来た、そう

いう苦労話は母からも祖母からも聞きました。お隣のおばさん、こちらのおばさん、あちらのおじさん、皆さん経験をされていて、そんな話を、私は聞いて育った年代なんです。

戦争の、日常生活のさまざまな実感を聞いて育った年代が、私です。もうすぐ80歳に手が届く感じで、ふと、振り返ったときに、12月8日の開戦の意味も分からないまま大きくなっている若い人たちに、こういう形で戦争体験を語り継ぐという企画があるのは、とてもありがたいことだと思っています。私自身は体験してないので、体験をしたおじ二人の話を、ぜひ、聞いていただきたい、聞いていただけるのは嬉しいと思って、参加させていただきました。「戦争の中で人は」とタイトルを書きましたが「戦争の中で人は人でなくなるんだな」というのを実感しています。

たまたま私の父は飛行場勤務で、娘に話をするときの雰囲気は、戦争の仲間、戦友たちの仲間と、大変だったけれども懐かしい時代、無事、帰れたので、そんな雰囲気がありました。死ぬまでにはもう一度樺太に行きたいという思いがあり、まだ国交が成立してない時期に樺太へ行きました。飛行場の跡と、自分たちが住んだ官舎もそのまま残っていたのを、父母は涙ながらに感動して喜びました。けれども、私はその次の世代ですから、違う感じを受けていました。父たちはお線香と花束を持って、戦友の方たちの慰霊で出掛けました。

次の朝の、朝市のような市場に出掛け、そこではたくさんの朝鮮の方々がバザーをしていました。実は飛行場を造ったのは日本の軍隊ではなくて、半島から引っ張ってきた朝鮮の人たちが零下何十度というところで飛行場を造ったと父は言っていました。その方たちが戦後、戻る人、戻らなかった人、その土地でそのまま生活している、いろいろな方たちがいて、少し日本語がしゃべれたので、いろいろ話を伺いました。結局、半島から連れてこられて、北の果ての樺太に行って、そこですさまじい飛行場を造る労働をされて、でも、帰ることができなくて、残った人たちです。それぞれ自分の子どもたちが、そこでロシアの人と結婚して、と話してくださいました。「何が一番悲しいか」涙ながらに朝鮮語がしゃべれない、ということでした。自分たちは話ができるけど、自分の子どもや孫、向こうの人と結婚をしてしまった人は、孫はロシア語をしゃべれるけれど、朝鮮語がしゃべれない「文化がそこで途絶える」という悲しさをお話しされました。そのときに、日本の軍隊は、そういうふうにして朝鮮の文化を断絶することをしていたのと、複雑な気持ちでした。

父は懐かしさのあまりに、樺太に行って線香をあげたい、お花を供え

たいという気はあったんですけども、それは多分、連れてきた朝鮮の人たちの犠牲のためということ、少しも入ってなくて、その限界を、本当に感じながら、どうすることもできなくて、母親と二人でそのバザーの中が一番高いセーターを買うだけの、複雑な思いがありました。父親は戦後も戦友会を毎年していましたので、多分、そういう点では、幸せな、懐かしく戦友会ができる、幸せな部類の人だったと思います。

父の下に二人の弟がいて、その叔父たちも年齢が一年一年かさむにつれて、これは聞いておかなければと、真っ正面から聞きました。

M叔父は娘にも妻にも話をしていなかったことも、直接聞きました。通信部隊で、いろいろな通信を傍受しながら「日本は負ける」と意識していたそうです。そういう状況の中で、台湾への派遣で船に乗りました。アメリカの攻撃が激しくて、南のマレーシアへ。でもそこにも行けなくて、フィリピンに上陸しました。負ける状況での上陸は本当にひどくて、軍隊の上官が部下を守る、のではなく、叔父の上官は「もう守れないから、お前たちは自分で生きていけ、俺は俺で生きていくから、お前たちも生きていけ」とジャングルに放り出されたと言いました。ジャングルで、必死になって食べる物を見つけたら、今度は夜が怖い。夜は食べ物をめぐって、仲間同士が闇に紛れて奪い合う、実は鉄砲が離せなかった。人間ではなくなるような状況の中で俺は生き延びた。マラリアにもかかって死ぬところまでいったけど、それも生き延びた。食べ物を確保したときに、必死の戦いだったけど、俺は生き延びたって聞いたときには、叔父さんは生き延びたけれど、相手は多分、半殺しの状況だったんだらうと想像しながら聞きました。その叔父が、その話を自分の子どもさんにはとてもできなかったと。



もう一つ話を聞いたのは、下のK叔父でした。8月15日に天皇の放送があった時に、実は、人間魚雷の命令を上官から受けていて。私が「天皇の放送があったから、人間魚雷の命令はなかったんだよね、叔父さん」と言ったら、そうじゃないって。「軍隊では上官の命令は絶対だから、実は逆らえないんだ」と。魚雷として突撃の命令を受けながら、でも天皇の正午の放送が先だったから、多分、命令を受けたメンバーの中で、突撃するか、行かなくてもいいんじゃないか、いろいろ考えがあったと思うんですね。でも実は、突撃していった仲間がいた。叔父は本当に悩み、苦しんだと思いますが「俺は行かない」と。「叔父さん、すごいじゃん」って、私なんかは「よかったよね、行かなくて、行かない決断ができてよかったよね」と単純に言っただけで、実は戦争中の教育を受けてい

た、あの時代の男の人たちは「俺は行かなかった、100パーセント万々歳」ではなくて「行った戦友たちに顔向けができなかった」そういう言い方をしていました。

人間魚雷のK叔父からは、直接聞けなくて、フィリピンのジャングルに放り出されたM叔父から聞いたんです。「魚雷として突撃しなかった、という自分の選択を、妻や子どもに話ができただけかしら？」って言ったら「とてもとてもあいつは、そんなことはできないよ」生き延びたけれども、自分の命を守ったけれども、ずっと感情的には申し訳なかったと。人間をそこまで究極の選択に追い込んで、戦後ずっと、亡くなるまでその気持ちを引きずりながら生きさせた戦争って何なんだろう。私は、まともな人間をまともに、幸せに生きることが大事だった人間の命をそこまで追い詰めて、死ぬまでずっと引きずらせる戦争の責任は何なんだ？って思いました。



戦争は自然災害と違い、必ず起こす人がいて、起こす側があって、戦争を仕掛ける側があって戦争は始まります。日本も、日中戦争は関東軍が仕掛けて戦争を始め、真珠湾に攻撃して戦争を始め、ベトナム戦争も、トンキン湾の攻撃をアメリカの自作自演で、拡大させて。ウクライナも、ガザも、必ず仕掛ける側があって。仕掛ける側は責任を取るべきだって私は思うんです。その一人一人が窮地に追い込まれる。例えば、本土の人も、沖縄でも何も責任がなかったのに、巻き込まれた形で4人に1人を亡くされたという現実です。

私は、沖縄タイムズの記事を読むまでは、実は「天皇制の制度の中にある天皇は、日本の軍隊の操り人形だった、個人的には天皇も犠牲になったんじゃないか」というふうに、単純に思っていました。でも、この記事を読んだときに「12月8日に開戦の詔勅をした昭和天皇は、実は国民に対する戦争の責任を感じていない人だったんだな」と。日本人を戦争に巻き込んで敗戦させて、しかも沖縄をああいう形にしておいてと、衝撃的に思ったんです。

日本政府が長年、存在を否定していた天皇メッセージが1979年、進藤栄一筑波大学名誉教授によって、アメリカの公文書館で発見されました。

内容は「日本国天皇は沖縄に対する米国の軍事占領が、25年ないし50年、あるいはそれ以上にわたって続くことを希望する。これが日本の防衛に役立ち、かつアメリカの利益になるだろう」というもの。日本政府も公式書類として認めているけれど、国民に広く知られているとは。

ですが、思えないと、沖縄タイムズの新聞には書いてありました。天皇の詔勅で始まった戦争、切り離された沖縄の“思い”が伝わる文面でした。ですが、日本の戦争責任者としての断罪は受けずに、A 級戦犯であった人たちも、戦後政治の舞台で政治を執るような曖昧な形になっていて。戦争に対する責任はきっちりととって来ませんでした。

叔父が言ってましたが、8月15日の放送で「日本は負けたから、全ての戦線において戦闘行為を中止せよ」とはっきりと言ってくれたら「忍び難きを忍び、耐え難きを耐え」と抽象的な言い方ではなくて、この段階で「全ての戦闘行為は中止せよ、日本は負けたんだ、自分の命令として発表する」ときちんと言ってくれたならば、人間魚雷として突撃しようか、留まろうか、という悩みもなかっただろう。突撃しないまま自分の命を守り、妻や娘のために生きた人生の、半分近くは懺悔と苦しみで、死ぬまで抱え込んでいることもなかっただろうと。

もし、1945年2月に、近衛文麿の上奏で戦争をやめていたら、あの原爆の広島も長崎も避けられたと思うんです。国民への責任とか、国民を守らなければいけない、という気概がないままに、日本の戦後はずっときたと思います。

センターにて「戦争のない平和な世界を」と、この企画が35回も続けられたことは、本当に素晴らしく、この企画を守り、育ててくださった皆さんに、本当に感謝します。でも、今、実は、戦争を日本が起こすような状況だと思うんです。国会の審議も経ず、閣議決定、日本の戦争準備がどんどん進められ、軍備がどんどん拡大される状況に、私はとても危機感を感じるんです。戦争は必ず起こす人がいる。私たちは戦争を起こさせないために、いろいろな形で声を出して行動していかなくちゃいけない時代に入ったと、新聞やニュースなどでつくづく感じる世相です。私は、戦争は体験しなかったけれど、戦争を体験した人の話を少しずつでも次の世代に、私の孫とか友達とかに話、できるといいなと思いながら、きょう、ここに参加させていただきました。ありがとうございました。

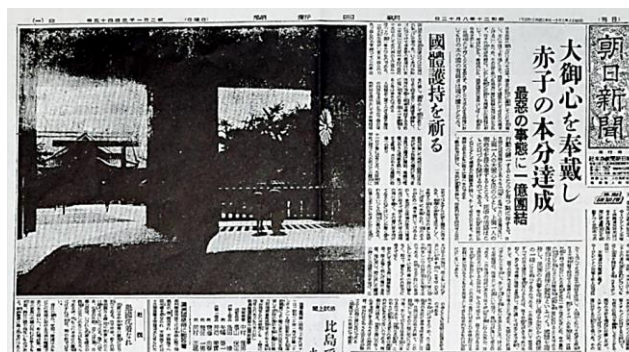
シベリア抑留と引き揚げ

案内役（現職高校教諭）水野 晴仁

今日はさまざまな世代の方が参加されています。ここにいる学生さんと私は42年の年齢差があります。今の時代では、この年齢差はそれほど大きな体験の違いはないかもしれません。私と元関東軍兵士の橋詰四郎さん（故人）の間にも同じく40年の年齢差がありました。しかし、隔たりが生み出す体験の差は、私とこちらの学生さんのそれとは全く異質のものです。橋詰さんは大正15年生まれ、19歳で徴兵され、戦場へと送り出され、私たちが経験してきた時代とは比べものにならない過酷な体験をしてきたのです。



戦争を直接体験した世代と、そうでない世代では、見てきた世界がまるで違います。戦争の記憶を持つ人々が次々とこの世を去り、彼らの語るべき記録は風化しつつあります。私は10年以上にわたり橋詰さんと全国を巡り、「戦争体験を語る集い」を続けてきました。彼から聞いた話を、今日は皆さんにお伝えしたいと思います。



昭和20年8月12日、終戦の3日前に発行された『朝日新聞』には「大御心を奉戴し、赤子の本分達成」と記されていました。「大御心」とは天皇陛下の考えを意味し、「赤子の本分」とは国民が天皇の子どもとしての役割を果たすことを指していました。つまり、「天皇のお心を胸に抱き、1億総団結して戦い抜け」という強いメッセージが発信されていたのです。



戦時中の日本では、国民の戦意を高めるためのプロパガンダが数多く展開されていました。厚生省体力局が制作したポスター『強く育てよ、お国のために』若者の体力増強を奨励し、戦争遂行に不可欠な「強い国民」を育てることが求められました。戦時中のグリコキャラメルのパッケージは、子ども

たちにも戦争を身近なものとして意識させていました。

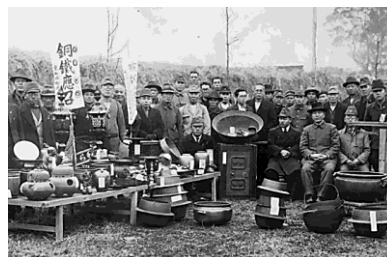
靖国神社は、戦争と密接な関係を持つ神社でした。東京都九段下に位置し、出征前の兵士が戦勝祈願をする場所でした。戦場で命を落とした兵士の魂は靖国神社に祀られるとされ、「靖国で会おう」という合い言葉で兵士達は戦地に向かいました。また、犬も戦地へ送られ、シェパードなど軍用犬が、索敵や伝令の任務に就きました。



国民生活においては「贅沢は敵だ」というスローガンが掲げられ、戦費を確保するために国民は貯蓄を奨励されました。「欲しがりません、勝つまでは」という標語のもと、倭約と物資供出が求められました。全国を巡回する移動講演隊が市民に貯蓄を呼びかけ、子どもたちがその様子を興味深く見守る光景も見られました。

光景も見られました。

伊勢神宮のポスターには「大日本は神国なり」と記され、国家神道の重要性が強調されました。戦争遂行のためには国民の意識を統一することが不可欠であり、伊勢神宮への参拝が推奨されました。



戦争に必要な金属資源が不足すると、寺院の釣り鐘や家庭の鍋、茶釜までもが供出され、戦車や兵器の材料として再利用されました。

さらに、市民の戦意を高めるため



に竹槍訓練が全国で実施、「アメリカ軍が上陸したら竹槍で戦え」と指導され、町中で軍事教練が行われました。

戦地へ向かう兵士の見送りも大々的に行われ、20 歳になると徴兵されて、家族や町の人々が総出で「行ってください」と送り出しました。軍服を着た若者が記念写真を撮り、のぼり旗を掲げながら戦地へ向かいました。「立派にお国のために死んでください」という言葉が定型句とされ、それを言わなければならない社会的圧力がありました。

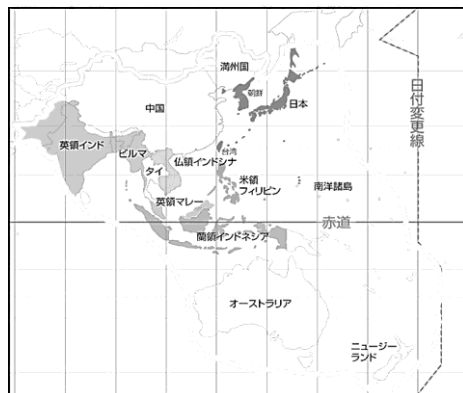
駅でも壮行会が行われ、出征兵士が国旗を振る市民に見送られながら戦地へ向かいました。壮行会への参加は義務のようなもので、出席しない者は「天皇陛下への不忠」、社会的な制裁を受けることもありました。



橋詰さんは「徴兵されて一人前」と語っていました。軍隊に入ることによって大人として認められ、たばこや酒が許され、誇りを感じたというのです。しかし、その誇りの裏には、戦場での過酷な現実が待ち受けていたのです。

当時の世界地図を見てみると、日本の周辺には多くの植民地が存在していました。ロシア（ソ連）、中国、オーストラリアはイギリスの統治下にあり、ベトナムはフランス、インドネシアはオランダの植民地でした。現在のように独立国家が成立しておらず、アジアの多くの地域が西欧列強の支配を受けていたのです。

この状況に対し、日本は「大東亜共栄圏」という構想を掲げ、アジアの国々を西欧列強の植民地支配から解放し、日本を中心とした新たな秩序を築こうとしました。「五族協和」として、日本、モンゴル、満州、朝



鮮、漢民族の共存共栄を掲げましたが、実際は日本による軍事支配の拡大を正当化する目的でした。

日本軍はオランダ、イギリス、フランスの植民地を次々と占領し、そこに日本の影響力を及ぼしました。戦争の勝利を象徴するものとして、各地に日本の神社が建設されました。例えば、シンガポールには「昭南神社」が建立され、「鎮座祭」と呼ばれる儀式が行われ、地元の子どもたちも参拝するなど、日本の文化的影響を強める取り組みが行われました。サハリン（樺太）南部（現ロシア領）は、当時日本の一部（北方領土）とされ、日本人が住んでいました。その樺太の真岡町には「樺太神社」が、台湾にも「台湾神社」が建設されました。宮城（天皇の住まいである皇居）に向かって最敬礼する儀式「宮城遙拝」が行われ、日本の皇室への忠誠を示す行為として、日本統治下の台湾住民にも推奨されました。



日本国内では、戦時教育が徹底されました。小学校の体育の授業では、女子は薙刀の訓練、男子は木刀を振る鍛錬、戦時中の体育は単なる運動ではなく、戦闘の準備としての意味を持っていました。さらに、「気合いだ」と叫びながら裸で走る訓練や授業中に教師も生徒も裸でいるという教育方針、精神の鍛錬が重視されました。現代では考えられませんが、当時は「強い体をつくる」と実施されました。火災発生時の対応としてバケツリレーの訓練があり、地域全体で防空意識を高めていました。



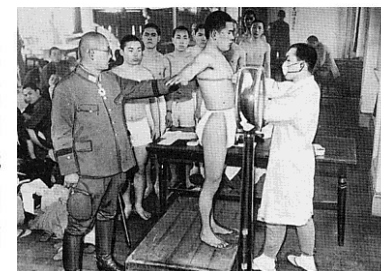
都市部では空襲が激化し、子どもたちは地方へと集団疎開しました。お寺を利用した授業風景や、共同生活を送る様子が記録に残っています。子どもたちは疎開先で家族と離れ、学校で髪を切られ、男児は全員丸坊主にされるなど、厳しい環境で生活を送りました。



また、戦時中の娯楽も戦意高揚の目的を持つものになりました。例えば、当時の人気雑誌『少年倶楽部』（現在の『少年サンデー』や『少年マガジン』）は、その内容が戦争を題材としたもので占められていました。子ども向けの漫画や物語も、戦場での活躍や日本の勝利を描いたものがほとんどでした。このように、日本国内は戦時体制に完全に組み込まれ、国民生活のあらゆる側面が戦争に向けられていました。

当時、日本には「帝都」「軍都」「神都」と呼ばれる三つの重要な都市がありました。「帝都」は天皇がおわす都である東京、「軍都」は広島や名古屋を指し、広島は呉港で戦艦大和を建造するなど軍需産業が発展し、名古屋は三菱重工業が零戦を生産するなど、戦争遂行の要となる都市でした。「神都」とは伊勢神宮のある三重県のことを指し、戦時中の国家神道の象徴的存在でした。

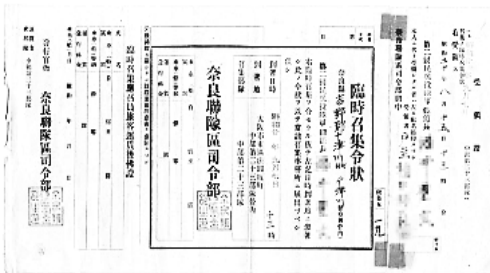
戦争においては徴兵制度が厳格に運用されました。男子は20歳になると徴兵検査を受けることが義務付けられていました。検査では、ふんどしを締めた者が8割、普通のパンツを履いている者が2割程度で、片足立ちなどの基本的な体力検査が行われました。



合格の判定は以下のように分類されました。

- ・甲種合格：最も健康で戦闘に適した者。
- ・乙種合格：軽度の近視や身体的な軽微な問題がある者。
- ・丙種合格：一部の障害があるが、補助的な役割で軍務に就ける者。
- ・丁種不合格・戊種不合格：重度の病気や障害があり、徴兵されない者。

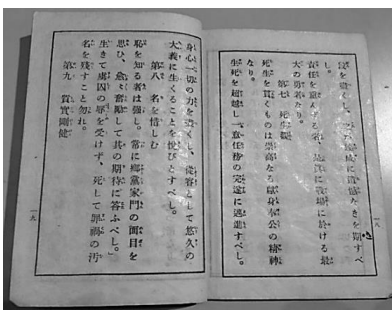
当時、国民は「天皇陛下の赤子」として扱われ、不合格という概念は極力避けられました。そのため、健康であればほとんどの者が何らかの形で軍務に就くことになりました。徴兵検査は非常に厳格で、健康診断では身体の隅々まで徹底されました。



徴兵が決定すると、「赤紙」と呼ばれる召集令状が送られてきます。通常の徴兵義務を果たした後、戦争がなければ4年以内に除隊し、家庭へ戻ることができました。しかし、戦争が続く限り、再び赤紙が届き、再召集され、出征兵士として送り出されることになります。単なる義務ではなく、国家のために戦うことが「男としての誇り」とされた時代でした。しかし、その誇りの裏では、戦場での過酷な現実が待ち受けていました。

戦時中、日本軍には軍人の心得をまとめた小冊子『戦陣訓』が配布されていました。その中でも特に有名なのが「生きて虜囚の辱めを受けず」という言葉です。これは「捕虜になることは恥である」という思想を植え付け、戦い続けることを兵士に強制するものでした。

また、戦闘教本『歩兵操典』には、銃

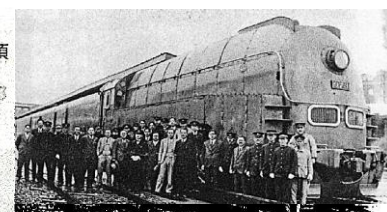


さらに、戦場での心得として「最後の一人になっても戦え」とする考えが根付いていました。戦闘中に指揮官を失っても、自分の武器を信じて戦い抜くように教育されていたのです。

の構え方や戦闘技術が詳細に記載されていました。軍に入隊すると、兵士たちは徹底した戦闘訓練を受け、人を殺す技術を叩き込まれました。例えば、敵の背後に回り、首を一瞬で切断する技術などが教えられ、返り血を浴びずに処理する方法まで指導されていたと言われています。

満州（現在の中国東北部）は、当時日本が支配していた地域であり、事実上の植民地でした。「満州国」という名のもと、日本が政治・経済・軍事的に管理していました。

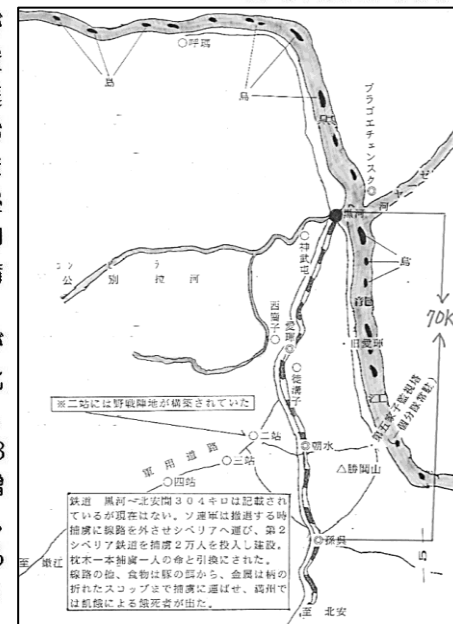
この地域には、鉄道網が広がり、日本軍の進出とともに軍事輸送が強化されました。例えば、満州鉄道は日本の技術力を活かした鉄道網であり、最前線までの軍隊輸送が可能でした。



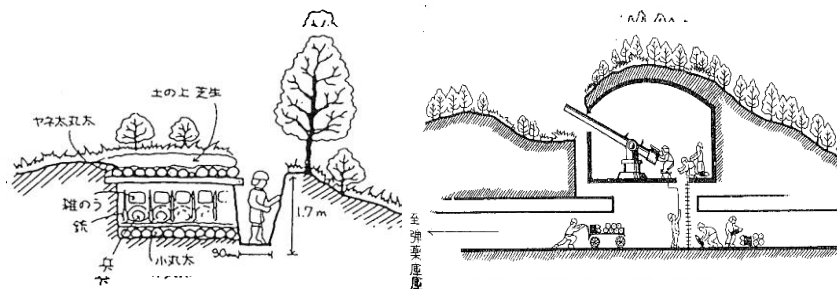
中でも流線型の高速列車が導入され、当時の日本国内の鉄道よりも先進的なものが満州に導入されていたのです。

満州とソ連の国境には、鉄道が敷かれ、日本軍が監視拠点を設置していました。戦時中、日本とソ連は「日ソ中立条約」を締結しており、表向きは敵対関係ではありませんでしたが、日本軍はソ連の侵攻に備えて国境付近に巨大な防御陣地を構築し、万が一の戦闘に備えていたのです。

国境防衛の拠点となったのが「朝水陣地」です。この陣地は南北70キロにも及ぶ大規模なもので、万一ソ連軍が攻めてきた場合、「3時間持ちこたえよ。本土からの増援が来るから」とされていました。しかし、現実には援軍が到着する保証はなく、「3時間かけて死ね」という命令と同義だったのです。



満州の国境地帯では、日本軍は塹壕を掘り、防御施設を作り続けました。戦争が始まる前から、塹壕に籠もる準備がされており、兵士たちは過酷な環境で日々訓練を行っていました。



地下要塞の建設にも力を入れ、コンクリートで補強され、巨大な爆弾が落ちて崩壊しないように設計されていました。これらの工事は、大量の中国人労働者が動員され、苛酷な労働の末に建設されたものでした。

特筆すべきは、日本軍が労働者に支給した「アヘン」です。アヘンを摂取させることは空腹感を和らげ、長時間の重労働に耐えさせるための手段でした。関東軍はアヘンの流通を支配し、世界の90%のアヘン生産シェアを占めていたとされています。

地下要塞が完成すると、機密保持のために、工事に従事した中国人労働者たちは秘密裏に処分されたといわれています。これは、満州における日本の支配の過酷さを象徴する出来事の一つでした。しかし、これらの防衛線が後にどれほど無力であったかは、戦争の終盤で明らかになっていきます。

戦時中、日本の関東軍が満州に建設した多数の防衛施設、地下基地も含まれ、現在では中国政府により保存、博物館として公開されています。当時の戦争の痕跡を直接見て、戦時下の状況を学ぶことができます。



本日の会場には一般市民が着用した国民服が展示されていますが、それに比べて軍服は機能的な作りになっていました。兵士たちはリュックサックのような背嚢を背負い、足にはゲートルを巻き付けていました。軍服の襟は取り外し可能で、負傷時に応急処置として縛ることができるよう設計されていました。

武器の一つに「擲弾筒」というものがあり、これは爆弾を発射する装置でした。兵士たちは重機関銃を構え、24時間体制で敵を監視していました。

しかし、戦場の過酷さは戦闘だけではありませんでした。関東軍が中国人を捕らえ、最初の軍事訓練として彼らを銃剣で突くという残虐な行為を課していたという証言があります。60人の兵士のうち2人がどうしても刺せず、恐怖で腰を抜かしてしまったそうです。翌日、その2人は他の兵士に囲まれ、教官による暴行を受けた末に処刑されました。彼らの遺体は「戦死」として24時間かけて火葬され、遺骨は家族のもとへ送られたといわれています。



このような話を信じがたいと感じるかもしれませんが、私自身の祖父が同じような体験を語っていました。祖父は満州で戦った際に、妊婦を銃剣で刺すよう命令されたことがあったと言います。小学生だった私が「なぜそんなことをしたのか」と尋ねると、祖父は「上官の命令だった」と答えました。「上官の命令とはいえ、そんなひどいことができるのか」と食い下ると、祖父は「命令に従わなければ自分が殺される。上官の命令は天皇陛下の命令だから、絶対に従わなければならなかった」と答えました。この話を思い出しながら、戦時中の写真を見ると、その残虐な現実が浮かび上がってきます。捕虜となった人々が手枷や足枷をされ、拷問を受け、水を無理やり飲まされる様子も記録されています。

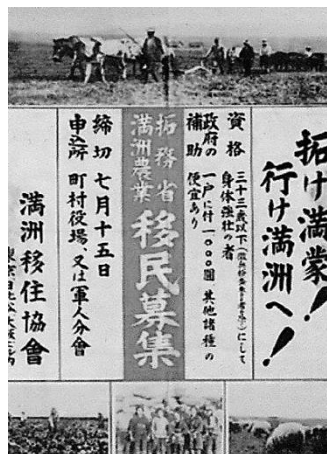


日本軍には「731部隊」という特殊部隊があり、彼らは人体実験を行っていたとされます。中国人を拉致し、銃弾を撃ち込んだ後、軍医が手術の訓練をするという名目で実験を行っていたという証言があります。

具体的には、四肢切断や手足の切断を施し、最後には心臓に薬剤を注

射して死に至らしめるなどという行為です。戦時中の極限状態において、命の価値が軽視されるような社会構造が生み出したものでしょう。

また、従軍看護婦として多くの女性も満州へ派遣され、軍医のもとで医療活動を行っていました。しかし、その活動の実態がどのようなものだったのか、詳細については今も議論が続いています。



戦争の現実、単なる戦闘行為にとどまらず、極限状態の中で行われた非人道的な行為の数々を含んでいました。これらの歴史を振り返ることは、過去の教訓を未来に生かすために重要なのです。

これが、満蒙開拓団の募集の看板です。約27万人の男女が、満州への入植を余儀なくされました。特に長野県の参加者が多く、約3万3,000人に達しました。長野県は当時貧しかったため、農家の次男や三男たちが生計を立てる手段として、満州への移住を選択せざるを得なかったのです。



この地図に示された黒い点は、すべて日本人が入植した町です。地平線まで広がるトウモロコシ畑の中、20歳前後の若者たちが開拓に従事していました。その中には「満州開拓青少年義勇軍」として組織された15歳から16歳の少年たちもいました。

当時、中学校の先生や校長が「君は素晴らしい資質を持っている。満州に行きなさい」と推薦する形で、生徒たちは満州への派遣を決められていきました。彼らは志願したという形を取られましたが、実際には拒否することができない状況だったのです。



彼らは普段は農作業に従事していましたが、いざ戦時となれば鉄砲を持ち、町を守る役割を担うとされていました。しかし、実際には戦う術もなく、ソ連軍が侵攻してきた際には、銃一丁では到底敵うはずがありませんでした。これほど幼い少年たちが前線に立たされたのです。農作業の様子を見ると、まるで子どもたちが遊んでいるかのようにも見えます。15歳、16歳の無邪気な顔をした少年たちが銃を持たされているのです。

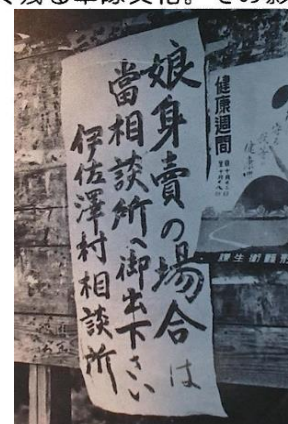
私はかつて小学校の教員をしていましたが、日本の教育における軍隊的な要素について考えさせられることが多くありました。例えば、学校の運動会で見られる整列や行進、「回れ右」「前へ進め」といった号令は、戦時中の軍事訓練と驚くほど似通っています。

この研究を進めるうちに、「自分は何に加担しているのだろうか？」と考えずにはいられなくなりました。教師として日々子どもたちに指導していることが、かつて戦時中に行われていた軍事訓練と重なるのです。無意識のうちに、戦時中の教育方針が現在の学校にも残っているのではないかと感じました。

戦争が終わった今でも、私たちの社会に根強く残る軍隊文化。その影響を見直すことが、過去を学び、未来へ活かすための重要な一歩となるのではないのでしょうか。

戦時中、日本の農村では、多くの若い女性が「身売り」という形で家計を支える現実がありました。特に東北地方では、貧しさから娘を売ることが一般的で、村の役場が娘の売買を斡旋していたという記録も残っています。こうして売られた女性の中には、慰安所へ送られ、従軍慰安婦として働かされた人々もありました。

当時の慰安所の写真には、「身も心も捧ぐ大和



撫子のサービス」という言葉が掲げられ、日本兵が順番を待つ姿が映し出されています。彼女たちは過酷な環境の中で、一日に何人もの相手をしなければならないこともありました。これは戦争の悲劇の一端を象徴するものであり、多くの女性が戦争の影で犠牲となった現実を物語っています。

1945年8月9日、長崎に原爆が投下されたその日に、ソ連は日本との戦争を開始しました。日本軍は、事前に準備された陣地で迎え撃つ予定でしたが、ミグ戦闘機による攻撃を受け、一方的に追い詰められました。なすすべもなく、「3時間玉砕しろ」との命令が下される中、兵士たちは絶望的な戦いに挑みました。しかし、実際には8月21日まで戦闘が続いたのです。戦争終結の知らせが届かないまま、日本軍は必死に抗戦し、戦車の下に潜り込んで自爆攻撃を仕掛ける「肉迫攻撃」などを行いました。しかし、ソ連軍の圧倒的な戦力の前に、日本軍は敗北を余儀なくされました。



降伏後、多くの日本兵が捕虜となり、ソ連軍に連行されました。その際、彼らに告げられた言葉が「東京ダモイ」でした。「ダモイ」とはロシア語で「帰国しましょう」という意味ですが、実際に彼らが向かった先は日本ではなく、シベリアの収容所だったのです。



捕虜たちは行き先を知らされることもなく、過酷な移動を強いられました。行軍の途中で負傷し、歩けなくなった者は、戦車で轢かれて「安楽死」させられることもあったといひます。血しぶきが舞う光景を目の当たりにしながら、兵士たちはシベリアへと運ばれていきました。

シベリアとは、当時のソ連邦の広大な領域の一部で、ウラル山脈を越えた極寒の地です。約60万人の日本兵がそこへ送られ、強制労働を課せられました。

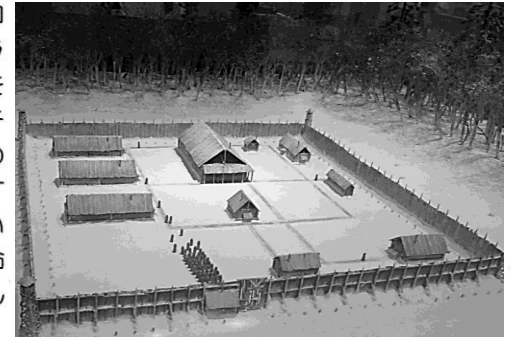
移送途中の列車の中で、ある兵士が車窓から見えた湖を指さし、「お、日本海に着いた!」と叫びました。しかし、それは日本海ではなく、ロ

シアのバイカル湖でした。日本への帰還を信じて疑わなかった兵士たちは、現実を受け入れることができず、その場で大げんかが起こることもあったといひます。

こうして、多くの日本兵が異国の地へと連行され、過酷な抑留生活が始まるのでした。

日本兵たちが送られた収容所は「ラーゲル」と呼ばれました。この言葉は、近年映画『ラーゲリからの手紙』でも取り上げられ、多くの人々に知られるようになりました。戦後、日本人が訪れた際に撮影された写真には、木造のバラックが並び、鉄条網に囲まれた施設の様子が記録されています。ここでは脱走が不可能な環境が整えられ、厳重な監視のもとで囚人たちが収容されていました。

シベリアの寒さとともに、抑留者たちを苦しめたのがシラミでした。至る所に湧き、体を蝕んでいくこの害虫は、発疹チフスという病を媒介し、多くの命を奪いました。病気が蔓延すると、次々に仲間が倒れていき、治療もままならないまま命を落とす者が後を絶ちませんでした。



抑留者たちには、過酷な強制労働が課されました。彼らが主に従事したのは、森林伐採や鉄道建設、炭鉱での作業でした。例えば、線路を敷設する際に使用される枕木は1本100キロもあり、「枕木1本、捕虜の命」と言われるほどの重労働でした。これは現在、舞鶴市の引揚記念館に展示されており、重さを体感することができます。

また、他の収容所では、石を削って線路の敷石を作る作業や、ダム建設、機関車工場での作業なども行われました。ウズベキスタンのナボイ劇場も、抑留された日本兵たちによって建設され、今もなお、その壁面には日本語の記録が残されています。

こうした重労働に従事する中で、わずかに食糧に恵まれる作業場もありました。コルホーズやソフホーズ（集団農場）で働くことになった者たちは、他の捕虜に比べて比較的食糧にありつくことができたといえます。彼らは空腹を凌ぐために、野草や木の葉を食べることもあり、「生き延びるためには何でも食べた」との証言が残っています。



当初の食料事情

収容所の食事は乏しく、1日2回の支給で、主食は黒パンとわずかなスープでした。栄養価が極めて低かったため、多くの捕虜が飢えに苦しみました。食事の配給の際、飯ごうの内蓋はスープを受ける皿代わりに使われており、わずかでも大きな内蓋が重宝されました。そのため、周径が1ミリでも大きい蓋を求める者が多かったのです。

橋詰さんが持ち帰った飯ごうには、彼が生き延びた証が残されています。その飯ごうの内蓋は、本来より一回り小さなサイズのものでした。ある日、隣の捕虜が「お前の飯ごうの蓋、大きいな。俺と交換してこないか」と頼んできたといえます。橋詰さんは気前よく応じましたが、その捕虜は、飢えと衰弱の末、精神を病んでしまいました。ある日、突然「お母ちゃんがぼた餅を持ってきたんだ！」と叫びながら、何かを探し続け、ついには命を落としたのです。

橋詰さんは「俺はもともと腹を空かせることに慣れていた。貧しい家で育ったから、空腹が当たり前だった」と語りました。こうした些細な違いが、生死を分ける状況だったのです。

収容生活が長引く中、一部の抑留者には家族へ手紙を書く機会が与えられました。しかし、その手紙には厳しい検閲があり、内容が制限されただけでなく、漢字の使用も禁止されていました。これは、ソ連側が日本人の手紙の内容を分析し、研究するためだったといわれています。

こうして、日本兵たちは異国の地で過酷な労働に従事しながら、帰国の望みを抱き続けました。しかし、その日が訪れるまでには、長い長い

年月が必要だったのです。



ととなりました。収容所では「ソ連は素晴らしい国で、日本はろくでもない国だ」という教育が施され、抑留者たちの意識を変えようとする試みが行われました。その一環として、日本語の新聞『日本新聞』が発行され、日本批判やソ連賛美、共産主義思想の浸透、さらには皇室廃止の主張が掲載されていました。これらの記事は、収容所内の印刷所で製作され、抑留者たちに配布されました。

また、収容所内では「レーニン主義の諸問題」についての勉強会が開かれ、抑留者たちは共産主義思想を学ばされました。

スターリンを称賛する「スターリン感謝運動」も展開され、「私たちをこんなに手厚く迎え入れてくれて、目を覚まさせてくれて、ありがとうございます」といった感謝文が作成されました。その最たる例が、25メートルにも及ぶ巻物で、そこには金糸で縫い取られた感謝の言葉が連なっていました。

やがて、長い抑留生活を経た抑留者たちに帰国の許可が下りました。帰国の際には、ソ連側がバンドを組織し、抑留者たちの帰国を見送る儀式が行われました。「日本に気をつけて帰ってくれ」と演奏が鳴り響く中、彼らは祖国へと帰還していきました。橋詰さんも、その一員として帰国の途についたのです。



しかし、多くの日本人にとって戦後の帰国の道は決して容易なものではありませんでした。満蒙開拓団や日本人居住者たちは、ソ連軍の侵攻を受け、命からがら逃げることを余儀なくされました。樺太の日本人も、

逃げ遅れれば命を奪われる状況に直面し、必死に避難を試みました。

ところが、避難には制約があり、特定の地域外に住む者たちは「作戦地域外」として放棄され、救出の対象から外されました。避難列車も限られており、多くの人々が「無蓋列車」（天井のない家畜輸送車）で脱出を試みましたが、列車を狙ったソ連軍のミグ戦闘機が襲撃し、多くの犠牲者を出しました。隣に座っていた者の頭が吹き飛ばされるような光景もあり、命がけの脱出劇が繰り広げられました。

逃げ切れなかった人々は、教会や寺院に身を寄せるしかありませんでした。しかし、そこにソ連軍が現れ、「そのきれいなお姉さん、お母さん、いらっしゃい」と連れ去られるという悲劇も起こりました。食糧不足が深刻化し、子どもたちは飢えに苦しみ、衰弱していきました。

こうした絶望的な状況の中で、ある決断を下す者もいました。「この子はもう育てられない」と、現地の中国人に子どもを託し、自分だけが帰国する親たちが現れました。こうして生まれたのが、「中国残留日本人孤児」の問題です。やがて、彼らの一部は成長後に日本へ帰国する機会を得ましたが、故郷の言葉も文化も分からず、日本社会に適應するのは決して容易ではありませんでした。

戦争は終わっても、その影響は長く、深く残り続けたのです。



シベリア抑留者や満州・樺太からの避難民にとって、帰国は決して容易なものではありませんでした。引き揚げ船の数は限られており、日本への帰還は何往復も必要でした。長蛇の列をなして待つ間に命を落とす

者、ようやく船に乗ることができても、日本が目前に迫ったタイミングで力尽きる者もいました。



最初に帰国した「高砂丸」の乗船者たちは、すし詰め状態で、日本へと向かいました。舞鶴港に到着した際には、大型船が着岸できないため、小型船に乗り換えて上陸しました。この専用栈橋が建設されました。何年にもわたって使用されましたが、その後撤去されました。現在、シベリア抑留者の有志の尽力により、そ

の栈橋が復元されて、当時の様子を残す風景となっています。



帰国を待ちわびる家族は、で名前を書いた看板を掲げ、親の帰還を願っていました。かし、いつ帰れるかは、誰に分かりませんでした。

帰還した者たちは、港に到するとまず所持品検査を受け、素裸にされることもありました。

さらに、病原体を防ぐためと称して「DDT」と呼ばれる農薬を頭から噴霧されました。これは当時の防疫処置の一環でしたが、現在では有害性が認識され、使用は禁止されています。

こうして帰国を果たし、家族との再会を喜ぶ者もいれば、戦地で命を落とした家族を待ち続ける人々もありました。舞鶴港には「岸壁の母」や「岸壁の妻」として知られる人々が佇み、帰ることのなかった者たちを偲びました。中には遺骨として帰国した者もありましたが、実際には遺骨ではなく、戦地の石が詰められていたケースもあったと言われています。

帰国船の中では、新たな悲劇も起こりました。「雲仙丸」での帰国中、若い女性たちが日本兵によって暴行を受け、3人の女性が玄界灘に身を投げる事件が発生しました。このような出来事は新聞や教科書には記録されていませんが、当時を知る人々によって語り継がれています。

日本政府は、戦争終結後にソ連との停戦交渉を進める中で、日本本土の安定を優先するために、海外に残された日本人を「棄民」とする決断を下しました。『京都新聞』によれば、戦後、約180万人の邦人が事実上見捨てられたとされています。

日ソ停戦会議の際、日本の代表団



は立

ったまま、ソ連の代表は座って交渉するという構図が、当時の力関係を象徴していました。

こうして、多くの人々が帰国を果たしたものの、その裏では数え切れないほどの悲劇が積み重ねられました。

戦争とは、一人ひとりの人生を大きく変えてしまうものです。本日は、シベリア抑留や満州開拓団の苦難、戦場に駆り出された兵士たち、そして日本国内で翻弄された人々の姿を振り返りました。これらの出来事は、遠い過去の話ではありません。戦争は、国を動かす政策の一つであると同時に、人々の生き方や価値観、未来までも左右するものです。

戦後、日本は平和国家としての道を歩み始めました。しかし、かつての歴史を忘れず、学び続けることが重要です。歴史を知ること、私たちは未来の選択をより良いものにできるはずです。

過去を振り返ることは、ただ悲惨な記憶を掘り起こすことではありません。それは、未来への責任を果たすための第一歩です。戦争で何を失い、何を学び、どのように生きるべきかを、私たちは今こそ考え続けなければなりません。

この講演の内容を振り返りたい方は、資料や本講座のムービーがご覧になれるホームページがありますのでご利用ください。また、連絡先もこちらにあります。講演の依頼があれば無償で対応致しますので、お声がけください。

<https://www.mizneyland.com/about-war.html>



展示品説明

戦争体験を語り継ぐ会 会員 吉井弘和

【国民服とかすりの着物】

これは戦時中の男子の制服、国民服で、ごわごわとした素材の服です。こういう服しか着られなかった。対照的なのは、かすりの着物。きれいに折り目をつけてたんすの奥にしまわれていたものです。こういう服を着て、戦争中、外を歩くことは、ちょっとはばかれる状況でした。家の中でおしゃれで着たのかもしれませんが。普通の人は非常に大変な服でした。

【マンガ全集『土の戦士』】

次にご紹介するのは、マンガ全集『土の戦士』です。細井さんは満蒙開拓青少年義勇軍に、愛知県から15歳で入隊され、81歳で亡くなりました。驚くことに、5年前の76歳から自分で当時の経験をマンガに描かれ、メッセージを残されました。戦争当時、茨城県の内原訓練所で3ヶ月、基礎訓練、義勇軍のための軍事訓練、農業をするための農業の実習などの訓練をされていたそうです。そういう15歳の高校生ぐらいの子どもが国を守るのです。満蒙開拓義勇団は、ソ連からの侵入を防ぐ意味も兼ねていて、満州の広い農地を開拓して、そこで豊かな生活ができるという触れ込みで応募をしていました。国を守るという熱い心で開拓団へ、15歳の子どもたちが全国から集まって、日常を共にして暮らしたそうです。細井さんは、非常に強く印象を持ってマンガにされました。最初は、満蒙開拓は戦地に行かなくてよい約束だったのに、実際は、男手は全部、戦地に召集されていき、そこへソ連が日ソ不可侵条約を破って侵攻してきました。残っていた女、子どもたちのところも攻めてきて、開拓の集落はそこから脱出という、大変な目に遭われたんです。満蒙開拓は、原野を開拓するわけではなくて、向こうに住んでいる中国の方の農地を奪って、そのまま畑として使って農業をやる実態がありました。細井さんが亡くなられる前に、記憶として強く残っていたのは、シベリア抑留のことでした。15歳で、最終的には昭和24年までソ連に抑留され、シベリア収容所に入り、大変な目をして日本に帰られた、その凄惨な記憶はなかなかマンガにはできなかったそうです。若い15歳の頃の、集団生活の懐かしい記憶だけを、マンガにされたのです。このマンガは、画力もすごい、共同生活も描かれたことも、とても素晴ら

しいものだと思います。貴重な物の一部の展示、細井さんのマンガの冊子は、ご遺族の方が、おじいさんが亡くなる直前に、昔の戦友に自分で、自費出版で配った物を、また印刷して配られたということで、きれいな冊子になっております。これは「ピースあいち」へ去年12月に寄贈された物を、今回、お借りしました。

【平和遺族会の記録の本・過去の戦時体験記録集・恩賜のたばこ】

平和遺族会の記録の本もあります。35年続くこの戦争体験を語り継ぐ集いで配られた今までの冊子も展示しております。恩賜のたばこもあります。これは、戦意高揚のために、愛知県から東京までマラソンランナーが走るときに、和菓子屋のお父さんが選手の後と一緒に走って東京まで行かれて、そのご褒美に天皇の菊の紋章に入ったたばこを下賜された、めでたいたばこが大事に保管されておりましたのを展示しております。



次世代からのメッセージ

父の新兵当時の体験

戦争体験を語り継ぐ会 会員 吉井 弘和

建具職人で、寡黙な父の従軍体験は、断片的で殆ど聞くことは出来なかった。しかしながら、母から間接的に聞いた話は酷いものであった。

父は召集される前に、しばらく大阪の兵器工場で、徴用されていた。ある時、男の徴用工数人が、女性の徴用工をしつこくからかう場面に出くわしたそうだ。鹿児島出身の女性の話す言葉が関西弁とは全く異なる方言なので、面白がり、からかう最中だった。正義感の強い父は、婦女子をいじめるとは、何事か！と怒って一括、追い払うだけをしたそうだ。

徴用工の男女が、会話するような時代でもなく、その後、父は出征し、奈良の部隊に入隊した。

新兵としての厳しい訓練を受ける日々の中で、故郷からの慰問の手紙は特段の楽しみであったと想像できるが、父に届いた手紙の中に、徴用工当時からかいから助けた女性からの手紙があったという。軍隊では手紙等はすべて検閲されていたので、未婚の女性からのお礼と慰労の手紙さえ、時局に相応しくないものとされて、上官の軍曹から詰問とからかいの対象となったという。新兵の前で読み上げさせられ、戦争中に不謹慎と難癖をつけては、殴られたそうだ。

それも新兵いじめ、鉄拳制裁として、毎晩、繰り返され、ぼこぼこに殴られる、たまたず、その女性に手紙を出さないで欲しいと懇願の手紙を出して、鉄拳は終わったらしい。

地獄のような日々であったと思われた。

鹿児島出身の女性の一途な想いも悲しい。

この話は、私が大学4年の時に、通学帰りの急行電車の中で、酔っ払いにからかわれる女性を助けて、停車駅で他の乗客と力を合わせておろした話をした時に、初めて母から聞かされた。親子はよく似とるなぁと感心された。

父からは、軍隊の話はほとんど聞かされず

「兵隊は要領をもって本分とすべし」

という言葉だけであった。

テレビの番組でも、ドイツ軍の戦争映画は観てもお構い無しであったが、日本軍に関わる番組や映画は決して見ない父であった。

【なぜ今、核問題を考えるのか：知る・伝える】

長崎大学核兵器廃絶研究センター客員研究員 西山 心

あの日から、今年で 80 年を迎えます。

1945 年 8 月 6 日 8 時 15 分、8 月 9 日 11 時 02 分。

広島にウラン型の原子爆弾「リトルボーイ」が、長崎にプルトニウム型の原子爆弾「ファットマン」が投下されました。その凄まじい威力は、一瞬にして日常を変え、何が起きたか分らぬまま塵となった方も中にはいらっしゃるでしょう。45 年未だに、広島で約 14 万人、長崎で約 7 万人が亡くなりました。終戦後も続く放射線の影響により多くの方が苦しみ、広島原爆死没者名簿には、34 万 4,306 人(令和 6 年 8 月 6 日時点)が、長崎原爆死没者名簿には、19 万 8,785 人(令和 6 年 8 月 9 日時点)が登録されています。原子爆弾によって亡くなった方々は、死者数として数字で表されますが、その背後にはそれぞれが生きた豊かな物語があります。

この資料では、以下の 5 点を一緒に考えていきたいと思います。

- 原子爆弾・核兵器とは何か、誰がなぜ保有しているのか
- 核兵器を規制する条約は、どのようなものがあるのか
- 核兵器はなぜ無くならないのか
- 核兵器と愛知県とのつながり
- 今後、私たちはどう核兵器問題と向き合っていくべきか



原子爆弾・核兵器とは何か、誰がなぜ保有しているのか

広島と長崎に投下された原子爆弾は、ウランやプルトニウム原子の原子核に、中性子を当てて人工的に壊す「核分裂」によって生まれた大量のエネルギーを兵器利用したものです。このように、核反応を利用した兵器を「核兵器」と呼びます。原子爆弾の炸裂後に発生した火球の表面温度は、約 0.2 秒後には摂氏 7,700 度にもなり、「空中にもう一つの太陽が生まれた」とも例えられるほどです。核爆発が発生す

ると、瞬く間に街を焼き尽くし、(,)瓶や瓦さえも溶かす強烈な「熱線」、建物の倒壊と多くの死傷者を生み出す「爆風」、そして長期にわたる健康被害(白血病やガン)を及ぼす「放射線」の脅威を引き起こします。また核兵器は、私たち人体だけでなく環境にも深刻な被害を及ぼします。

広島・長崎に投下された原子爆弾は、一瞬にして多くの尊い命を奪いました。しかし、戦後 80 年が経とうとする今も、核兵器の脅威は消えることなく、世界に影を落とし続けています。一体、誰が何を目的として保有しているのでしょうか。

現在、核兵器を保有している国は 5 つあります。アメリカ・ロシア・イギリス・フランス・中国です。彼らは、核不拡散条約(NPT)で核兵器の保有を認められた国家です。NPT については、後ほどの章で詳しくご紹介いたします。この条約に不参加であるインド、パキスタン、イスラエル、北朝鮮(すでに脱退したとの自国の主張)は、NPT 外で核兵器を保有していることから「核武装国」とも呼ばれます。この 9 カ国が核兵器を保有する目的には、主に以下が考えられています。



- 1 大国としての象徴のため：核兵器を製造するには、多大な資金と能力が不可欠です。核兵器はウラン(自然物)やプルトニウム(人工物)の化学物質から構成されますが、兵器として用いるためには、その濃度を高くする必要があります。高濃度ウランを作る施設や工場の設置、素材・部品や人材の確保、徹底した安全管理と情報管理が欠かせません。核を持つことは、これらの段階を踏み、国家として潤沢な資金や人材があることの象徴としても捉えることができます。これにより国際的地位と影響力が高まり、大国と外交上の影響力を強化できると考えられています。
- 2 自国とその同盟国の安全を守るため：核兵器は、通常兵器よりも強力な防衛手段とみなされるため、他国からの軍事的脅威に対抗するために核を保有する国もあります。例えば北朝鮮は、政権の生存を確保するために核兵器を重視している傾向があります。
- 3 抑止力を求めるため：核兵器を持つことで、敵対国からの攻撃を防げるという考えがあります。この理論は「核抑止論」として知られています。核兵器を持つ国同士が、核兵器を使って攻撃された場合に、報復として核を使用する意思と能力があると互いに認識させることで、受ける核攻撃への恐怖から核兵器使用を回避する考え方です。またこの理論は、核兵器保有国間のみならず、非核保有国が核保有国に対する攻撃や挑発を躊躇させる効果も含まれます。

核兵器を規制する条約は、どのようなものがあるのか

先ほど、核保有国とは核不拡散条約（NPT）のもと定められた 5 力国だと説明しました。NPT とは、核兵器の拡散による核兵器保有国の増加を防ぐこと、核の平和利用（原子力発電など）を主な目的としており、現在 191 力国が参加しています。これは、世界で最も多くの国が参加する国際条約の一つです。NPT では、条約を草案していた 1967 年時点で、すでに核実験を成功させ核兵器を保有していたアメリカ、ソ連（現ロシア）、イギリス、フランス、中国の 5 力国を核兵器国と定めています。核兵器国に対しては、他国への核兵器の譲渡や、非核兵器国が核爆発を起こす装置の作成や援助をしてはいけないという義務を課しました。また、非核兵器国に対しては、いかなる目的でも核爆発を起こす装置を開発、製造、入手することを禁止しています。これらの義務によって、核兵器の拡散を防ごうとしているのです。



その他、核兵器に関連する国際条約には、あらゆる核爆発実験を禁止することを目的とした「包括的核実験禁止条約」があります。1996 年に採択された条約ですが、特定の核技術保有国の批准が未了のため、2025 年現在も未発効の状態が続いています。

同じく国際的な規模の核関連条約に、「核兵器禁止条約」があります。核兵器禁止条約は 2017 年 7 月に国連総会で採択され、核兵器の使用、威嚇、開発、実験、生産、製造、取得、保有または貯蔵を禁止しています。この条約の特徴は、国際法上、核兵器を全面的に禁止する初めての条約であること、そして、起草や採択において、市民社会や被爆者が中心的な役割を果たしたことにあります。被爆者や核実験被害者、赤十字国際委員会（ICRC）、医師、科学者、若者、学者など、世界各国の市民社会が核兵器廃絶を推進し、最終的な条約の採択に重要な役割を果たしました。しかし一方で、核保有 5 力国およびその同盟国は核兵器禁止条約へ参加の意向を示しておらず、条約自体の効力が問題視される難しい問題も抱えています。

今回取り上げた国際条約の他にも、地域間・二力国間における核兵器関連の条約があります（例：非核兵器地帯・非核地帯、米露間での新戦略兵器削減条約 など）。

核兵器はなぜ無くならないのか

広島・長崎に投下された原子爆弾の威力を目の当たりにした国際社会は、核兵器を国際的に管理する方針を掲げました。しかし、1946 年の第 1 回国連総会から意見が対立し、論議は行き詰まり、国連主導による核兵器の国際管理は失敗に終わります。際限のない核軍拡競争が始まり、今世界には 12,120 発の現役核弾頭が存在しているのです [2]。先述した国際条約、地域・二国間条約は、核兵器の拡散防止や核軍縮の推進、そして地域の安全保障の強化に重要な役割を果たしています。その一方で、核兵器は依然として保有国の安全保障の重要部分を握っており、核の脅威がない世界への道のりは遠いものを感じる場面もあるでしょう。

なぜ、核兵器は無くならないのでしょうか。

- ① 安全保障のジレンマ：一国が核を放棄すると、他国に対して脆弱になるとの見解があります。核を持つ国が「自国と同盟国の安全保障を守る」手段として、核兵器保有をしている限り、その廃絶のステップは進みにくいものになってしまうのです。
- ② 抑止力への信念：核兵器の存在によって全面核戦争や第三次世界大戦といった大きな戦争の勃発を防ぐ「核抑止」への考えが根強いことから、核保有国は「核を手放せば戦争のリスクが高まる」と懸念しているのです。
- ③ 軍事・産業複合体の影響：核兵器の開発・維持には巨大な産業が関わっており、経済的・政治的な利害関係が絡んでいます。核兵器工場があることによって町が潤ったといった実例があるように、核兵器製造が人々の暮らしを支えている生活があります。核廃絶により工場を閉鎖した後の補償や、軍需産業の体制改革など、経済や軍事政策が複雑に絡むことから、廃絶が困難だという考えがあるのです。
- ④ 核軍縮レジームの進展の遅さ：核兵器の数を減らす、新戦略兵器削減条約や核兵器禁止条約は存在するものの、核保有国が足並みを揃えることが難しく、交渉が進めずに進展が停滞しています。

核兵器と愛知県とのつながり

原爆の被害といえば、多くの人々が広島や長崎を思い浮かべるでしょう。しかし、原爆投下に向けた準備の過程で、日本各地にもその影響が及んでいたことは、あまり知られていません。その一例が、第二次世界大戦末期に日本各地に投下された「模擬原爆」、通称「パンプキン

爆弾」です。

パンプキン爆弾は、広島と長崎に投下された原子爆弾とほぼ同じサイズ・形状を持つ高性能爆弾であり、アメリカ軍が本番の原爆投下に向けた精度向上や戦術検証のために使用しました。1945年7月から8月にかけて、日本の複数の都市に約50発のパンプキン爆弾が投下され、愛知県もその被害を受けた地域のひとつです。1945年8月14日、終戦の前日に愛知県春日井市に数発の大型爆弾による空襲があったと記録が残っています。米軍が広島と長崎に原子爆弾を投下した後の日付ですが、春日井市に落とされた大型爆弾とは長崎に投下されたファットマンと同じ大きさ・重さで作られていたものでした。詳しい情報は、ピースあいちさんの記事「シリーズ 戦争を考えるための遺跡 12『終戦前日8月14日春日井に投下された模擬原爆』」に掲載されています[2]。

今後、私たちはどう核兵器問題と向き合っていくべきか。

戦後80年を迎える私たちに、できること。

それは【知る】こと、そして【伝える】ことではないでしょうか。

筆者は戦争のない時代に生まれ育ちました。そんな私
が知る「戦争」とは、国語の教科書に出てくる物語で
した。しかし、小学校の修学旅行で長崎原爆資料館を
訪れ、生まれて初めて、戦争と人間の死を知ったので
す。あの日から12年経った今、私は核兵器問題の
研究者として、被爆者が残した声なき声を、世界に広め伝える活動に携
わっています。知らなければ、伝えられない。だからこそ、学び続ける
ことにこだわっています。そして、学びを内に留めるのではなく、外に
広げて平和の波紋を繋げていくのも、平和への要です。戦争記憶継承の
語り部活動は、平和への道を次世代へ伝えることができるのです。その
言葉に刻まれた戦争の記憶が、戦争のない未来を築いてゆけるのです。



長崎大学大学院 多文化社会学研究科 博士課程後期 核廃絶・平和系専攻

長崎大学核兵器廃絶研究センター 客員研究員 西山心

[1]*現役核弾頭、退役・解体待ちなどを含めた数字

参考文献：長崎大学核兵器廃絶研究センター『世界の核弾頭データ

2024年版』(2024年6月) https://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/recna/topics/46410?doing_wp_cron=1739195178.4717979431152343750000

[2] 金子 力, シリーズ 戦争を考えるための遺跡 12

『終戦前日8月14日春日井に投下された模擬原爆』ピースあいち研究会, 2012年10月) https://www.peace-aichi.com/piace_aichi/201210/vol_35-13.html

「戦争と平和の資料館 ピースあいち」

・戦争と平和の資料館・ピースあいち (peace-aichi.com)



【編集後記】

世界各国では、出口の見えない戦争が続いています。実際に戦場になっている国だけではなく、その戦場へ国民を兵士として送り出す国もあります。形を変えて、例えば、武器提供、情報提供など、世界中が戦争に加担しているのが現状でしょう。

また、それぞれの国を分断していくかのような、経済戦争ともいえる状況に、世界が振り回され、人権問題にも発展しかねない状況に苦しんでいる人たちもいます。

日本人の美德として「おたがいさま」の精神があります。「人」という文字は支えあいを表わす文字だと言われます。また、人は人の中で生きて、活かされていく存在だから「人間」であるとも言われます。

支えあうためには、お互いをよく知り、大切に思う気持ちが欠かせないでしょう。相手に敬意を払い、尊重しあえるからこそ、「おたがいさま」です。権利主張のためではなく、心から温かな気持ちで「おたがいさま」と言いあえる社会から、だんだん離れてしまっているのではないのでしょうか。

真に人と人が支えあえる間柄であれば、社会は平和になるでしょう。

心の中に希望の灯を持ちながら「戦争に加担しているかも知れない自ら」に問いかけ続けていきたいと思います。心の平和は戦争終息への第一歩です。

全ての人たちの心から、希望の灯が消えないよう、祈りを込めて、最終集の編集後記といたします。

これまでご協力いただきました、皆さまにも心からお礼申し上げます。

ありがとうございました。



＜第32集＞戦時体験記録集

令和7年5月17日発行 戦争体験を語り継ぐ集い実行委員会

＊この冊子は古紙パルプを含む再生紙を使用しています＊